■第23回（2023.5.20）の記録

西田文学読書会（第24回）　　2023.6.17（13：40～16：00）

　　村上春樹「窓」（初出：「バート・バカラックはお好き」）

　岡部・佐野・渡辺・楯谷・奈原・大藤・田中

・渡辺・日常生活を背景にした味わいのある小説。貧乏学生と満たされない孤独な若い主婦のふれあい。若い学生、主婦の淡い期待があったのではないか。

・岡部・事実と虚構が問題。虚構とは一度自分の意識の中に入って再構成されたモノ（後半）で、事実（前半）と混ざり合い、その境界が問題になっている。

・楯谷・「物事のリアリティーというのは伝えるべきものではないのだ。それは作るべきものなのだ」＝この小説のテーマは「リアリティーとは何か」である。

・佐野・味わいも感じないし、リアリティーも全く感じない＝謎。改訂が大きい。異性を組み合わせることなど非常に軽い感じ。

・奈原・妖しさ、いやらしさが背景にあるが、には蓋をした適度な距離感＝さらっとしたリリシズム、淡白なストイシズムに村上春樹の文学スタイルがある。

・大藤・ごく単純なふつうの「ハンバーグステーキ」とは何か。普通のハンバーグから特殊なハンバーグへとは、最初は誰でもよかったが、最終的には特定の人が好い？

・佐野・二層構造を感じる（つなぐものが「窓」）＝謎を感じさせる。「○○風のハンバーグと普通のハンバーグ」「意味とリアリティー」「表現と事実」「表と裏」等。

・岡部・「意味＝リアリティー／意味がないもの・平板」という関係がある。女性が詳しく書くことで意味を込めた➡リアリティーを持って主人公の興味を引き起こした

・楯谷・〇意味がないもの・平板。⦿意味・リアリティーのあるもの＝普通のハンバーグ。〇面白さを狙った、とってつけたようなもの（○○風ハンバーグ）

言語表現

■第24回〈討論の柱〉

⓵「男女の劣情（？）」の奥にあるもの？

⓶小説の構造的核心をなす二層構造とは？

⓷「僕はあの時彼女と寝るべきだったんだろうか？／これがこの文章のテーマだ。」このような疑問がテーマとはどういうことか？

・岡部

・佐野

・渡辺

・楯谷

・奈原

・大藤

・田中

・渡辺

10年後の思い出で、

初出と「窓」…結末が「窓」に移っていると思う。

・佐野

男女の劣情の商品化＝ハンバーグ店の女の子、ペンソサエティー、

リアリティー・ものごとの核心、は「分からない」

〇リアリティーは「伝えるべきもの」＝何であるかという答えを出している人

〇わからないもの＝「作り出していくもの」＝分からないからこそ作る＝心のこもった文章になる

事のリアリティーというのは伝えるべきものではないのだ・作り出すもの

・村上

サガン「ブラームスはお好き」孤独～男女～恋愛

・書く・リアリティー・作家になる

・奈原

〇二重構造＝劣情・下部構造（アンダーグラウンド）がないと水車は回らない・水車論（無法地帯。宗教問題・談合がないと社会は回らない）

「社会と下部構造」（窓がその媒介）経済論、文学論、哲学論

〇「ブラームスはお好き」

ブラームス＝communication能力欠如・ため息さえも出ない＝音符になる交響曲第四番第四楽章～ため息・主知主義的音楽・シューマンの妻クララとの関係

断絶を作品に昇華する＝リアリティ―が音符に結晶する

〈主知主義／ロマン主義〉

〈音楽という形式／内容としての愛情・恋・愛・劣情〉

作家の文学創造の問題

〈ワグナー／ブラームス〉

ブラームスは人間も音楽も大変重い・退屈・鈍重

相手の女性はなんらかのアクションを待っているが、それを言えない鬱屈した重さ、退屈さ

村上春樹は大変軽くて、「僕は寝るべきだったのだろうか」を表現すること自体が軽い（意味は深いのだろうが。本気で考える価値はありそうだが）。小説としてはカットしたほうがよい。「秘すれば花」という品格を持つべき。

ブラームスという言葉を出すことで文学作品としてのバランスがとれているのではないか？

・楯谷

「ブラームスはお好き」読んだが、

男性二人がクズすぎて、サガンの小説の中でのブラームスの扱いがあんまりだという憤りを感じた

サガンもあまりブラームス好きじゃない

僕も軽い昼メロ的作品を「それほど嫌いじゃない」

高く評価していないが全否定でもない

・佐野

・ブラームスへの理解（鈍重・退屈）はそれほど重くない

・「窓」の彼女もブラームスに対する重いイメージを持っていないと思う

・バート・バカラックと並べている論じている

・楯谷

小説を書く人自身の認識

村上春樹・ビートルズはお好きとは書かない

ブラームスの好きな人はそういう雑なことは言わない

「バート・バカラックはお好き」とは本当にはよく知らない人の言葉

ちびっこの時に聴いた「雨にぬれても」のような、軽いおしゃれな音楽＝サガンもそういうイメージ～意外とおしゃれじゃない

「窓」の女性＝バート・バカラック、サガンを推している

「寝るべきだったのか？」

②　それから　①③へ行くのが良い

最初のバージョンは①が中心だったが後改稿で変わった

・彼女の文章＝作者の一方的な思いの押し付け

・僕の評価＝構図のあるポイントのある絵（作る）になっている＝意味が生じる（嘘、作為も交じって来るが）

意味は見た人にゆだねられるのだが、

「窓」とは風景だ、窓枠が額縁になって孤独な主婦の絵がそこにある。僕にはそういう窓はいっぱいある。

・主婦との会話を「引いた視点」から鳥瞰的に描いたところに作品化が行われている。

・作家志望の人の文章（おそらく自分の思いの押し付けが多いのではないか）をたくさん読むとそう思えて来る。

・「僕」の上から目線はきらいだが、この主婦はメンタルな結びつきを求めていただけかもしれない。

・「僕はあの時彼女と寝るべきだったんだろうか？」＝ぼく自身が、僕の作っている窓枠を額縁とした風景と一体化すべき

語り手

登場人物

・小説家が自分の小説の語りや語り手に関心を向けていることを示す科白だと思う

・岡部

その場合、小説家から見たらこの女性は窓の一つに見えるのだが、女性から見たら僕はどう見えるか？

盾谷＝彼女は書きたいことを書いていただけだが、作家としての文章に目覚めさせられた

単に自分の謂いたいことを言うだけでは小説にはならない

・岡部

・電車の窓から多くの窓を見る場面があるが、そこに窓がいくつあるか？

・作家の見る電車の窓、カメラを引いて作家もその中に含めるか、その背後には読者の窓もあると思う

・楯谷

1読者が小説を読んでいる表象するもの、

2僕が見ている電車の窓、

3僕が見ている風景の中にあるいっぱいのマンションの窓

若い主婦の思い出話

①手紙

②ハンバーグの回想

③10年後の現在

・岡部

共感する。1が一番外側の大きいフレーム

女性の窓と僕の窓だけではヒッチコックの「裏窓」

これは、読者に感情移入させない作品

・大藤

二重構造の風景の話に共感

語りてが風景を語っている

彼女が話している言葉（主人との関係）

を見ると

僕と彼女とでは、地と図の関係がまったく違う

地と図

僕

地：書くことによって描き出される風景（作り出すことが大事）

図：意味（分からないもの）

彼女

地：わからないモノ（僕から見れば、彼女に見えている図だけが伝えられる、なんでそういうふうに考えるのだろうと思い、風景が伝わってこない＝彼女の話が思い出せない＝生そのもの）

図：リアリティ＝現実に起こっていること・彼女自身に主観的に見えているもの

彼女＝自分には書く力がない＝図ばかりで地がない

僕＝僕にとっては地ばかりで、図がない

僕は「生きる」ということについての図がない

佐野：関心を持ったら「図」になるのではないか？

大藤：そうなんだか、この小説に限っては、僕の風景とは図を作り出す風景（地）所に僕の主張がある

佐野：地が風景とはどういうことか？

大藤：僕は風景（出来事・事実）を描くべきだ

彼女は図（意識的判断・主題）を描くべきだ

佐野：リアリティとは？

大藤：風景と主題のどちらにリアリティを見るかで二人は意見が異なる。彼女にとって感じたことをそのまま伝えても僕に理解出来ていない

⓵「男女の劣情（？）」の奥にあるもの？

⓶小説の構造的核心をなす二層構造とは？

⓷「僕はあの時彼女と寝るべきだったんだろうか？／これがこの文章のテーマだ。」このような疑問がテーマとはどういうことか？

■次回の日程

~~7月15日~~

〇7月22日

7月15日がレポート締切日

そこには実にいろんな種類の人生の事象が――ひどく大きなことからひどく細かいことまで―ちりばめられ、詰め込まれ、放り出されていたように記憶している。彼女たちの伝えるそれらのメッセージは僕には、二十一歳か二十二歳の大学生にとっては、奇妙に非現実的なものに感じられた。それらはおおかたの場合リアリティーというものを欠いているように思えたし、ある場合には全面的に無意味なことであるようにも思えた

【村上春樹全作品版】

窓　　　　　　　　　　　　村上春樹

91

拝啓

寒さも日一日とやわらぎ、日差しの中に微かな春の匂いが感じられる今日このごろとなりました。お元気ですか。

先日のお手紙楽しく拝見させていただきました。とくにハンバーグ・ステーキとナツメグの関係についてのくだりは生活感にあふれたなかなか良い文章だと思います。台所の暖かい匂いや玉ねぎを切るとんとんという包丁の音が生き生きと感じられるのです。そういうところが一箇所でもあると、文章が生きてきます。

あなたのお手紙を読んでいるうちにハンバーグ・ステーキがたまらなく食べたくなり、さっそくその夜近所のレストランに行って注文してみました。そのレストランには実に八種類ものハンバーグ・ステーキがありました。テキサス風とか、カリフォルニア風とか、 ハワイ風とか、日本風とか、そういった感じです。テキサス風というのはとても大きいんです。それだけのことです。そんなことを知ったら、テキサスの人たちはきっとびっくりしちゃうでしょうね。ハワイ風というのにはパイナップルがあしらってあります。カリフォルニア風というのは……忘れました。日本風には大根おろしがついています。店は洒落た造りで、ウェイトレスはみんなけっこう可愛くて、とても短かいスカートをはいています。

しかし僕はなにもレストランの内装の研究をしたり、ウェイトレスの脚を眺めたりするためにそこに行92ったわけではありません。僕はただハンバーグ・ステーキを、それもなに風でもないごく単純なハンバーグ・ステーキを食べに行ったのです。

僕はウェイトレスにそう言いました。僕が食べたいのはごく普通のハンバーグ・ステーキなのだと。

申しわけありませんが当店にはなになに風というハンバーグ・ステーキしかないのです、とウェイトレスは答えました。

でももちろんウェイトレスを責めることはできません。彼女がメニューを決めるわけでもないし、彼女が好んで食器を下げるたびにふとももが見えちゃうような制服を着ているわけでもないからです。ですから、僕はにっこり笑ってハワイ風ハンバーグ・ステーキというのを注文しました。食べる時にパイナップルをどけちゃえばいいのよ、と彼女が教えてくれたのです。

世の中というのは奇妙な場所です。僕が本当に求めているのはごくあたりまえのハンバーグ・ステーキなのに、それがある時にはパイナップル抜きのハワイ風ハンバーグ・ステーキという形でしかもたらされないのです。

ところであなたの作ったのは、ごくあたりまえのハンバーグ・ステーキなん97でしょうね？ 手紙を読んでいて、僕はあなたの作ったごくあたりまえのハンバーグ・ステーキを是非食べてみたくなりました。

それに比べると国電の切符自動販売機についての文章は少し上すべりではないかという気がします。目のつけどころは面白いと思うのですが、風景が読み手に伝わってこないのです。どうか鋭くあろうと思わないで下さい。文章というのは結局は間にあわせのものなのです。

全体としての今回の手紙の点数は70点というところです。少しずつ文章力は上がっています。焦らず、焦らず、がんばって下さい。次の手紙を楽しみにしています。はやく本物の春が来るといいですね。

　3月12日

93

P・S・

「クッキー」の詰めあわせ、どうもありがとうございました。おいしく頂いております。しかし当会の規則上、手紙以外の個人的な交流は一切禁じられておりますので、今後このようなお気遣いなきようお願いします。

でもとにかく、ありがとうございました。

＊

といったアルバイトを僕は一年ばかりつづけた。二十二歳の頃のことである。

僕は飯田橋にある「ペン・ソサエティー」という名前のわけのわからない小さな会社と契約していて、 一通二千円の約束でひと月に三十通以上のこれと似たりよったりの手紙を書きまくった。

「あなたも相手の心に響く手紙を書けるようになります」というのがこの会社のキャッチ・フレーズだった。入会者は入会金と月謝を払い、月に四通の手紙を「ペン・ソサエティー」あてに書く。それに対して我々「ペン・マスター」が添削をし、前にあげたような感想と指導の手紙を書くのである。僕は文学部の学生課で募集の貼り紙を見てその会社の面接試験を受けにいった。僕はいろんな事情があって、大学を留年することが決まったばかりだった。親は留年するのなら来年から仕送りを減らすと通知してきた。それで当然のことながら僕は真剣に生活費を稼ぐ必要に迫られていたのだ。面接試験があり、いくつか作文を書き、そして一週間後に僕は採用された。それから一週間かけて専門の指導員に添削のこつや、指導のノウハウや、さまざまな心得を教えられた。それはとくにむずかしいことではなかった。

女性の会員には男性の、男性の会員には女性の「ペン・マスター」がつく。僕の引き受けた会員はのべ94二十四人で、年齢層は下は十四歳から上は五十三歳まで、中心は二十五歳から三十五歳までの女性だった。 つまり殆どの会員が僕より年上ということになる。それではじめの一ヵ月ばかり、僕はひどく混乱することになった。なぜなら会員の多くは僕よりずっと文章が上手く、ずっと手紙を書き慣れていたからだ。僕といえば、それまでまともな手紙なんて殆ど書いたこともないときている。僕は冷や汗を流しながら最初の一ヵ月をなんとかやりすごした。きっと何人かは―それは会員の権利として会則にもうたわれていたことなのだけれど―ペン・マスターの交換を求めてくるだろうと、僕は覚悟を決めていた。

しかし一ヵ月たっても誰ひとりとして僕の文章能力に不満を洩らす会員は現われなかった。それどころか、僕の評判は上々である、と会社の人は僕に教えてくれた。そして三ヵ月後には僕の「指導」によって会員たちの文章力も向上してきているようにさえ思えてきた。不思議なものである。彼女たちは心の底から僕を教師として信頼しているようだつた。そう思うと、僕も講評の手紙をそれまでよりずっと気楽にのびのびと書けるようになった。

（★）

今になって考えてみるとわかるのだけれど、彼女たちはみんな淋しかったのだ。彼女たちは（あるいは彼らは）ただ誰かに何かを書いてみたかったというだけのことだったのだ。そして――その頃の僕には信じられないことだったのだが――彼女たちにはその手紙を出すべき相手さえみつけられなかったのだ。彼女たちはラジオのディスク・ジョッキーに手紙を出すタイプではなかった。彼女たちはもっとパーソナルなものを求めていたのだ。たとえそれが「添削」や「講評」のようなものであったとしてもだ。

僕はそんな具合に二十代の初めの歳月を、片足のおっとせいみたいにその微温的な手紙のハレムの中で過ごした。

会員たちは実にいろんな手紙を僕あてに送ってくれた。退屈な手紙があり、ほほえましい手紙があり、95悲しい手紙があった。ずいぶん昔のことだし、残念ながら彼女たちの手紙は手元に取ってないので(それは規則としてぜんぶ会社に返還しなくてはならなかった)、はっきりと具体的には思い出せないのだが、そこには実にいろんな種類の人生の事象が――ひどく大きなことからひどく細かいことまで―ちりばめられ、詰め込まれ、放り出されていたように記憶している。彼女たちの伝えるそれらのメッセージは僕には、二十一歳か二十二歳の大学生にとっては、奇妙に非現実的なものに感じられた。それらはおおかたの場合リアリティーというものを欠いているように思えたし、ある場合には全面的に無意味なことであるようにも思えた。でも僕に人生の経験が欠けているということだけがその原因ではなかった。今になってみればわかるのだけれど、ほとんどの場合、物事のリアリティーというのは伝えるべきものではないのだ。それは作るべきものなのだ。そして意味というのはそこから生まれるものなのだ。でももちろん僕にはそんなことはわからなかったし、彼女たちにもわからなかった。それも、それらの手紙に書かれたすべての物事が、僕の目に奇妙に平板に映った原因のひとつだったと思う。

わけあってそのアルバイトを辞めることになった時、僕の指導していた会員たちはみんな残念がってくれた。僕もある意味では―手紙を書きつづけるという作業には正直なところ少々うんざりはしていたけれど――残念だった。多くの人々がこれほどまで僕に対して正直になってくれるチャンスなんて、この先二度とないような気がしたからだ。

＊

ハンバーグ・ステーキに関していえば、僕は彼女(最初の手紙の女性)の作ったハンバーグ・ステーキを食べることができた。

彼女は三十二歳で子供はなく、夫は世間では五番めくらいに有名な商事会社につとめていた。僕が最後の96手紙に残念ながら今月いっぱいでこの仕事を辞めることになったと書いた時、彼女は僕を昼食に招待してくれた。ごくあたりまえのハンバーグ・ステーキを作ります、と彼女は書いていた。会の規則には反していたけれど、僕は思いきって行ってみることにした。何ものも二十二歳の青年の好奇心を押しとどめることはできない。

彼女のマンションは小田急の沿線にあった。子供のいない夫婦にふさわしく、さっぱりとした部屋だった。家具も照明も彼女のセーターも、高価ではないけれど感じの良いものだった。僕は彼女が思っていたよりずっと若々しくみえることに、彼女は僕が思っていたよりずっと若いことに驚いた。彼女は僕を自分より年上の男だと思っていた。「ペン・ソサエティー」は「ペン・マスター」の年齢をあかさないのだ。

しかしお互いに一度ずつ驚いてしまうと、初対面の緊張はほぐれた。我々は同じ列車に乗り遅れてしまった乗客同士といった雰囲気でハンバーグ・ステーキを食べ、 コーヒーを飲んだ。列車といえば、彼女の部屋のある三階の窓からは電車の線路が見えた。その日はとても良い天気で、まわりのアパートのベランダは布団やシーツでいっぱいだった。時折布団を叩くぱたぱたという音がした。僕はその音を今でも思い出せる。それは奇妙に距離感のない音だった。

ハンバーグ・ステーキの味は素敵だった。香辛料がほどよくきいて、かりっとこげた表面の内側には肉汁がたっぷりとつまっていた。ソースの具合も理想的だった。正直に言って、こんなに美味しいハンバーグ・ステーキを食べたのは生まれて初めてとは言えないにせよ、実に久し振りのことだった。僕がそう言うと、彼女は喜んだ。

我々はコーヒーを飲んでしまうと、バート・バカラック（注）のレコードを聴きながら身の上話をした。とはいっても僕には身の上話というほどのものはないから、ほとんど彼女がしゃべった。学生時代は作家になりたかったの、と彼女は言った。彼女はフランソワーズ・サガンのファンで、僕にサガンの話をしてくれ97た。彼女は「ブラームスはお好き」が気に入っていた。僕もサガンは嫌いではない。少なくともみんなが言うほど退屈だとは思わない。誰もがヘンリー・ミラーやらジャン・ジュネみたいな小説を書かなくてはならないという規則はないのだ。

「でも私には何も書けないわ」と彼女は言った。

「今からでも遅くはありませんよ」と僕は言った。

「私にはわかるのよ。私には何も書けないって教えてくれたのはあなたなのよ」と彼女は言って笑った。「あなたに手紙を書いているうちに、それがよく分かったのよ。自分にはそういう力はないんだって」

僕は赤くなった。今ではそんなことはほとんどないけれど、二十二のころ、僕はすぐに赤くなった。「でも、あなたの文章にはとても正直なところがありましたよ」と僕は言った。

彼女は何も言わず口もとに微笑を浮かべた。とても小さな微笑だった。

「少なくとも僕はあなたの手紙を読んでハンバーグ・ステーキを食べたいと思った」

「きっとその時おなかがすいてたのよ」と彼女はやさしく言った。

まあ、そうかもしれない。

電車がかたかたという乾いた音をたてて窓の下を通り過ぎていった。

＊

時計が五時を打った時、そろそろ失礼しなくちゃと僕は言った。「御主人が帰って来る前に夕食の仕度をしなくちゃいけないんでしょ？」

「主人はとてもとても遅いの」と彼女は頬杖をついたまま言った。

「真夜中より前には帰ってこないのよ」

「ずいぶん忙しいんですね」98

「そうね」と言って、彼女はしばらく間を置いた。

「手紙にも一度書いたと思うけれど、主人とはいろんなことがうまく話しあえないの。気持が伝わらないのよ。あの人と話していると、お互いにまるで違う言葉で話をしているみたいに思えることがよくあるの」

どう答えていいのか僕にはよくわからなかった。そういう風に気持を伝えられない相手と一緒に暮らしているということじたいが僕にはうまく理解できなかったのだ。

「でも、いいの」と彼女は静かに言った。本当にそれでいいみたいに聞こえた。「長いあいだ手紙を書いてくれてありがとう。とても楽しかったわ。あなたのところに手紙を書いたことで、私はなんだかずいぶん救われたのよ」と彼女は言った。

「僕も楽しかったですよ」と僕は言った。でも正直に言って、彼女がどんな手紙をどんな文章で書いていたのか、僕にはほとんど思い出せなかった。

彼女は何も言わずに、壁にかかった時計をしばらく見ていた。まるで時間の流れかたを点検しているみたいに。

「大学を出たらどうするつもりなの？」と彼女は僕に訊ねた。

何も決めてないのだと僕は言った。自分が何をすればいいのかもよくわからないのだ、と。僕がそう言うと彼女はまた徴笑んだ。「私は思うんだけれど、あなたは何か文章を書く仕事につくといいんじゃないかしら。あなたが講評のときにくれる手紙はとても素敵だったから。私はあれをすごく楽しみにしていたのよ。本当に。お世辞じゃなくて。あなたはそれをただ単にアルバイトのノルマとして書いていたのかもしれないけれど、でもあそこには何か心がこもったものが感じられたのよ。ぜんぶちゃんとまとめて取ってあるし、ときどき取り出して読みなおしているのよ」99

「ありがとう」と僕は言った。「それからハンバーグ・ステーキをどうもご馳走さま」

＊

十年たった今でも小田急に乗って彼女のマンションの近所を通るたびに、彼女とあのかりっとしたハンバーグ・ステーキのことを思い出す。僕は線路沿いに並んだマンションの建物を眺め、あれはどの窓だったかなと思う。彼女の家の窓から見えた風景を思い出し、あれはどのあたりだったかな、と考えてみる。でも僕にはもうぜんぜん思い出せない。

あるいは彼女はもうそこには住んでいないかもしれない。でももしまだそこに住んでいるとしたら、その窓の奥で彼女は今でも一人でバート・バカラックの同じレコードを聴きつづけているんじゃないかという気がする。

僕はあの時彼女と寝るべきだったんだろうか？

これがこの文章のテーマだ。

その答えは僕にはわからない。今でもぜんぜんわからない。どれだけ歳をとっても、どれだけ経験をかさねても、わからないことはいっぱいある。僕はただ電車の窓からそれらしい建物の窓をじっと見上げるだけだ。すべての窓があの彼女の住んでいた部屋の窓であるように思えることもある。そしてどの窓もぜんぶ違う窓であるようにも。そこにはあまりにも多くの窓があるのだ。

【村上春樹全作品版】

窓　　　　　　　　　　　　村上春樹

91

拝啓

寒さも日一日とやわらぎ、日差しの中に微かな春の匂いが感じられる今日このごろとなりました。~~いかがお過ごしでしょうか？~~お元気ですか。

先日のお手紙楽しく拝見させて~~頂~~いただきました。とくにハンバーグ・ステーキとナツメグの関係についてのくだりは生活感にあふれたなかなか良い文章だと思います。台所の暖かい匂いや玉ねぎを切るとんとんという包丁の音が生き生きと感じられるのです。そういうところが一箇所でもあると、文章が生きてきます。

あなたのお手紙を読んでいるうちにハンバーグ・ステーキがたまらなく食べたくなり、さっそくその夜近所のレストランに行って注文してみました。そのレストランには実に八種類ものハンバーグ・ステーキがありました。テキサス風とか、カリフォルニア風とか、 ハワイ風とか、日本風とか、そういった感じです。テキサス風というのはとても大きいんです。それだけのことです。そんなことを知ったら、テキサスの人たちはきっとびっくりしちゃうでしょうね。ハワイ風というのにはパイナップルがあしらってあります。カリフォルニア風というのは……忘れました。日本風には大根おろしがついています。店は洒落た~~つくり~~造りで、ウェイトレスはみんなけっこう可愛くて、とても短かいスカートをはいています。

しかし僕はなにもレストランの内装の研究をしたり、ウェイトレスの~~下着~~脚を眺めたりするためにそこに行92ったわけではありません。僕はただハンバーグ・ステーキを、それもなに風でもないごく単純なハンバーグ・ステーキを食べに行ったのです。

~~で、~~僕はウェイトレスにそう言いました。僕が食べたいのはごく普通のハンバーグ・ステーキなのだと。

申しわけ~~ない~~ありませんが当店にはなになに風~~の~~というハンバーグ・ステーキしかないの~~だ~~です、とウェイトレスは答えました。

でももちろんウェイトレスを責めることはできません。彼女がメニューを決めるわけでもないし、彼女が好んで食器を下げるたびに~~パンティー~~ふとももが見えちゃうような制服を着ているわけでもないからです。ですから、僕はにっこり笑ってハワイ風ハンバーグ・ステーキというのを注文しました。食べる時にパイナップルをどけちゃえばいいのよ、と彼女が教えてくれたのです。

世の中というのは奇妙な場所です。僕が本当に求めているのはごくあたりまえのハンバーグ・ステーキなのに、それがある時にはパイナップル抜きのハワイ風ハンバーグ・ステーキという形でしかもたらされないのです。

ところであなたの作ったのは、ごくあたりまえのハンバーグ・ステーキなん97でしょうね？ 手紙を読んでいて、僕はあなたの作ったごくあたりまえのハンバーグ・ステーキを是非食べてみたくなりました。

それに比べ~~て~~ると国電の切符自動販売機についての文章は少し上すべりではないかという気がします。目のつけどころは面白いと思うのですが、風景が読み手に伝わってこないのです。どうか鋭くあろうと思わないで下さい。文章というのは結局は間にあわせのものな~~ん~~のです。

全体としての今回の手紙の点数は70点というところです。少しずつ文章力は上がっています。焦らず、焦らず、がんばって下さい。次の手紙を楽しみにしています。はやく本物の春が来るといいですね。

　3月12日

93

P・S・

「クッキー」の詰めあわせ、どうもありがとうございました。おいしく頂いております。しかし当会の規則上、手紙以外の個人的な交流は一切禁じられておりますので、今後このようなお気遣いなきようお願いします。

でもとにかく、ありがとうございました。

~~P・S・~~

~~前々回の御手紙にありました御主人との「精神的トラブル」のこと、上手く解決するといいですね。~~

＊

といったアルバイトを僕は一年ばかりつづけた。二十二歳の~~ころ~~頃のことである。

僕は飯田橋にある「ペン・ソサエティー」という名前のわけのわからない小さな会社と契約していて、 一通二千円の約束でひと月に三十通以上のこれと似たりよったりの手紙を書きまくった。

「あなたも相手の心に響く手紙を書けるようになります」というのがこの会社のキャンチ・フレーズだった。入会者は入会金と月謝を払い、月に四通の手紙を「ペン・ソサエティー」あてに書く。それに対して我々「ペン・マスター」が添削をし、前にあげたような感想と指導の手紙を書くのである。僕は文学部の学生課で募集の貼り紙を見てその会社の面接試験を受けにいった。僕はいろんな事情があって、大学を留年することが決まったばかりだった。親は留年するのなら来年から仕送りを減らすと通知してきた。それで当然のことながら僕は真剣に生活費を稼ぐ必要に迫られていたのだ。面接試験があり、いくつか作文を書き、そして一週間後に僕は採用された。それから一週間かけて専門の指導員に添削のこつや、指導のノウハウや、さまざまな心得を教えられた。それはとくにむずかしいことではなかった。

女性の会員には男性の、男性の会員には女性の「ペン・マスター」がつく。僕の引き受けた会員はのべ94二十四人で、年齢層は下は十四歳から上は五十三歳まで、中心は二十五歳から三十五歳までの女性だった。 つまり殆どの会員が僕より年上ということになる。それではじめの一ヵ月ばかり、僕はひどく混乱することになった。なぜなら会員の多くは僕よりずっと文章が上手く、ずっと手紙を書き慣れていたからだ。僕といえば、それまでまともな手紙なんて殆ど書いたこともないときている。僕は冷や汗を流しながら最初の一ヵ月をなんとかやりすごした。きっと何人かは―それは会員の権利として会則にもうたわれていたことなのだけれど―ペン・マスターの交換を求めてくるだろうと、僕は覚悟を決めていた。

しかし一ヵ月たっても誰ひとりとして僕の文章能力に不満を洩らす会員は現われなかった。それどころか、僕の評判は上々である、と会社の人は僕に教えてくれた。そして三ヵ月後には僕の「指導」によって会員たちの文章力も向上してきているようにさえ思えてきた。不思議なものである。彼女たちは心の底から僕を教師として信頼しているようだつた。そう思うと、僕も講評の手紙をそれまでよりずっと気楽にのびのびと書けるようになった。

~~その頃の僕にはわからなかったけれど、~~今になって考えて~~みれば~~みるとわかるのだけれど、彼女たちはみんな淋しかった~~んだろうと思う~~のだ。彼女たちは（あるいは彼らは）ただ誰かに何かを書いてみたかったというだけのことだったのだ。~~そしてきっとぉ互いがお互いを許しあうことを求めていたのだろう。~~そして――その頃の僕には信じられないことだったのだが――彼女たちにはその手紙を出すべき相手さえみつけられなかったのだ。彼女たちはラジオのディスク・ジョッキーに手紙を出すタイプではなかった。彼女たちはもっとパーソナルなものを求めていたのだ。たとえそれが「添削」や「講評」のようなものであったとしてもだ。

僕はそんな具合に~~二十一の冬から二十二の春まで~~二十代の初めの歳月を、~~足の悪い~~片足のおっとせいみたいにその微温的な手紙のハレムの中で過ごした。

会員たちは実にいろんな手紙を僕あてに送ってくれた。退屈な手紙があり、ほほえましい手紙があり、95悲しい手紙があった。~~その一年間のあいだに僕はなんだか二、三年ぶんまとめて年をとってしまったような気がする。~~ずいぶん昔のことだし、残念ながら彼女たちの手紙は手元に取ってないので(それは規則としてぜんぶ会社に返還しなくてはならなかった)、はっきりと具体的には思い出せないのだが、そこには実にいろんな種類の人生の事象が――ひどく大きなことからひどく細かいことまで―ちりばめられ、詰め込まれ、放り出されていたように記憶している。彼女たちの伝えるそれらのメッセージは僕には、二十一歳か二十二歳の大学生にとっては、奇妙に非現実的なものに感じられた。それらはおおかたの場合リアリティーというものを欠いているように思えたし、ある場合には全面的に無意味なことであるようにも思えた。でも僕に人生の経験が欠けているということだけがその原因ではなかった。今になってみればわかるのだけれど、ほとんどの場合、物事のリアリティーというのは伝えるべきものではないのだ。それは作るべきものなのだ。そして意味というのはそこから生まれるものなのだ。でももちろん僕にはそんなことはわからなかったし、彼女たちにもわからなかった。それも、それらの手紙に書かれたすべての物事が、僕の目に奇妙に平板に映った原因のひとつだったと思う。

わけあってそのアルバイトを辞めることになった時、僕の指導していた会員たちはみんな残念がってくれた。僕もある意味では―手紙を書きつづけるという作業には正直なところ少々うんざりはしていたけれど――残念だった。多くの人々がこれほどまで僕に対して正直になってくれるチャンスなんて、この先二度とないような気がしたからだ。

＊

ハンバーグ・ステーキに関していえば、僕は彼女(最初の手紙の女性)の作ったハンバーグ・ステーキを食べることができた。

彼女は三十二歳で子供はなく、夫は世間では五番めくらいに有名な商事会社につとめていた。僕が最後の96手紙に残念ながら今月いっぱいでこの仕事を辞めることになったと書いた時、彼女は僕を昼食に招待してくれた。ごくあたりまえのハンバーグ・ステーキを作ります、と彼女は書いていた。会の規則には反していたけれど、僕は思いきって行ってみることにした。何ものも二十二歳の青年の好奇心を押しとどめることはできない。

彼女のマンションは小田急の沿線にあった。子供のいない夫婦にふさわしく、さっぱりとした部屋だった。家具も照明も彼女のセーターも、高価ではないけれど感じの良いものだった。僕は彼女が思っていたよりずっと若々しくみえることに、彼女は僕が思っていたよりずっと若いことに驚いた。彼女は僕を自分より年上の男だと思っていた。「ペン・ソサエティー」は「ペン・マスター」の年齢をあかさないのだ。

しかしお互いに一度ずつ驚いてしまうと、初対面の緊張はほぐれた。我々は同じ列車に乗り遅れてしまった乗客同士といった雰囲気でハンバーグ・ステーキを食べ、 コーヒーを飲んだ。列車といえば、彼女の部屋のある三階の窓からは電車の線路が見えた。その日はとても良い天気で、まわりのアパートのベランダは布団やシーツでいっぱいだった。時折布団を叩く~~ばたばた~~ぱたぱたという音がした。僕はその音を今でも思い出せる。それは~~枯れた井戸の底から聴こえてくるような~~奇妙に距離感のない音だった。

ハンバーグ・ステーキの味は素敵だった。香辛料がほどよくきいて、かりっとこげた表面の内側には肉汁がたっぷりとつまっていた。ソースの具合も理想的だった。正直に言って、こんなに美味しいハンバーグ・ステーキを食べたのは生まれて初めてとは言えないにせよ、実に久し振りのことだった。僕がそう言うと、彼女は喜んだ。

我々はコーヒーを飲んでしまうと、バート・バカラックのレコードを聴きながら身の上話をした。とはいっても僕には身の上話というほどのものはないから、ほとんど彼女がしゃべった。学生時代は作家になりたかったの、と彼女は言った。彼女はフランソワーズ・サガンのファンで、僕にサガンの話をしてくれ97た。彼女は~~『~~「ブラームスはお好き~~？』~~」が気に入っていた。僕もサガンは嫌いではない。少なくともみんなが言うほど退屈だとは思わない。誰もがヘンリー・ミラーやらジャン・ジュネみたいな小説を書かなくてはならないという規則はないのだ。

「でも私には何も書けないわ」と彼女は言った。

「今からでも遅くはありませんよ」と僕は言った。

「私にはわかるのよ。私には何も書けないって教えてくれたのはあなたなのよ」と彼女は言って笑った。「あなたに手紙を書いているうちに、それがよく分かったのよ。自分にはそういう力はないんだって」

僕は赤くなった。今ではそんなことはほとんどないけれど、二十二のころ、僕はすぐに赤くなった。「でも、あなたの文章にはとても正直なところがありましたよ」と僕は言った。

彼女は何も言わず口もとに微笑を浮かべた。~~一センチの何分の一かの、~~とても小さな微笑だった。

「少なくとも僕はあなたの手紙を読んでハンバーグ・ステーキを食べたいと思った」

「きっとその時おなかがすいてたのよ」と彼女はやさしく言った。

まあ、そうかもしれない。

電車がかたかたという乾いた音をたてて窓の下を通り過ぎていった。

＊

時計が五時を打った時、そろそろ失礼しなくちゃと僕は言った。「御主人が帰って来る前に夕食の仕度をしなくちゃいけないんでしょ？」

「主人はとてもとても遅いの」と彼女は頬杖をついたまま言った。

「~~いつも~~真夜中~~にしか帰らないわ~~より前には帰ってこないのよ」

「ずいぶん忙しいんですね」98

「そうね」と言って、彼女はしばらく間を置いた。

「~~それに~~手紙にも一度書いたと思うけれど、~~私たちの仲はあまりうまく行ってないの~~主人とはいろんなことがうまく話しあえないの。気持が伝わらないのよ。あの人と話していると、お互いにまるで違う言葉で話をしているみたいに思えることがよくあるの」

どう答えていいのか僕にはよくわからなかった。そういう風に気持を伝えられない相手と一緒に暮らしているということじたいが僕にはうまく理解できなかったのだ。

「でも、いいの」と彼女は静かに言った。本当にそれでいいみたいに聞こえた。「長いあいだ手紙を書いてくれてありがとう。とても楽しかったわ。あなたのところに手紙を書いたことで、私はなんだかずいぶん救われたのよ」と彼女は言った。

「僕も~~です~~楽しかったですよ」と僕は言った。でも正直に言って、彼女がどんな手紙をどんな文章で書いていたのか、僕にはほとんど思い出せなかった。

彼女は何も言わずに、壁にかかった時計をしばらく見ていた。まるで時間の流れかたを点検しているみたいに。

「大学を出たらどうするつもりなの？」と彼女は僕に訊ねた。

何も決めてないのだと僕は言った。自分が何をすればいいのかもよくわからないのだ、と。僕がそう言うと彼女はまた徴笑んだ。「私は思うんだけれど、あなたは何か文章を書く仕事につくといいんじゃないかしら。あなたが講評のときにくれる手紙はとても素敵だったから。私はあれをすごく楽しみにしていたのよ。本当に。お世辞じゃなくて。あなたはそれをただ単にアルバイトのノルマとして書いていたのかもしれないけれど、でもあそこには何か心がこもったものが感じられたのよ。ぜんぶちゃんとまとめて取ってあるし、ときどき取り出して読みなおしているのよ」99

「ありがとう」と僕は言った。「それからハンバーグ・ステーキをどうも~~ありがとう~~ご馳走さま」

＊

十年たった今でも小田急に乗って彼女のマンションの近所を通るたびに、彼女とあのかりっとしたハンバーグ・ステーキのことを思い出す。僕は線路沿いに並んだマンションの建物を眺め、あれはどの窓だったかなと思う。彼女の家の窓から見えた風景を思い出し、あれはどのあたりだったかな、と考えてみる。でも僕にはもうぜんぜん思い出せない。

あるいは彼女はもうそこには住んでいないかもしれない。~~どの窓かはもう忘れてしまったけれど、~~でももしまだそこに住んでいるとしたら、その窓の奥で彼女は今でも一人でバート・バカラックの同じレコードを聴きつづけているんじゃないかという気がする。

僕はあの時彼女と寝るべきだったんだろうか？

これがこの文章のテーマだ。

その答えは僕にはわからない。今でもぜんぜんわからない。どれだけ~~歳~~年をとっても、どれだけ経験をかさねても、わからないことはいっぱいある。僕はただ電車の窓からそれらしい建物の窓をじっと見上げるだけだ。すべての窓があの彼女の住んでいた部屋の窓であるように思えることもある。そしてどの窓もぜんぶ違う窓であるようにも。そこにはあまりにも多くの窓があるのだ。

【講談社文庫版】

バート・バカラックはお好き？

　　　　村上春樹

95

拝啓

寒さも日一日とやわらぎ、日差しの中に微かな春の匂いが感じられる今日このごろとなりました。いかがお過ごしでしょうか？

先日のお手紙楽しく拝見させて頂きました。とくにハンバーグ・ステーキとナツメグの関係についてのくだりは生活感にあふれたなかなか良い文章だと思います。台所の暖かい匂いや玉ねぎを切るとんとんという包丁の音が生き生きと感じられるのです。

あなたのお手紙を読んでいるうちにハンバーグ・ステーキがたまらなく食べたくなり、さっそくその夜レストランに行って注文してみました。そのレストランには実に八種類ものハンバーグ・ステーキがありました。テキサス風とか、カリフォルニア風とか、 ハワイ風とか、日本風とか、そういった感じです。テキサス風というのはとても大きいんです。それだけのことです。ハワイ風にはパイナップルがあしらってあります。カリフォルニア風というのは……忘れました。日本風には大根おろしがついています。店は洒落たつくりで、ウ96ェイトレスはみんな可愛く、とても短かいスカートをはいています。

しかし僕はなにもレストランの内装の研究をしたり、ウェイトレスの下着を眺めたりするためにそこに行ったわけではありません。僕はただハンバーグ・ステーキを、それもなに風でもないごく単純なハンバーグ・ステーキを食べに行ったのです。

で、僕はウェイトレスにそう言いました。

申しわけないが当店にはなになに風のハンバーグ・ステーキしかないのだ、とウェイトレスは答えました。

でももちろんウェイトレスを責めることはできません。彼女がメニューを決めるわけでもないし、彼女が好んで食器を下げるたびにパンティーが見えちゃうような制服を着ているわけでもないからです。ですから、僕はにっこり笑ってハワイ風ハンバーグ・ステーキというのを注文しました。食べる時にパイナップルをどけちゃえばいいのよ、と彼女が教えてくれたのです。

世の中というのは奇妙な場所です。僕が本当に求めているのはごくあたりまえのハンバーグ・ステーキなのに、それがある時にはパイナップル抜きのハワイ風ハンバーグ・ステーキという形でしかもたらされないのです。

ところであなたの作ったのは、ごくあたりまえのハンバーグ・ステーキなん97でしょうね？ 手紙を読んでいて、僕はあなたの作ったごくあたりまえのハンバーグ・ステーキを是非食べてみたくなりました。

それに比べて国電の切符自動販売機についての文章は少し上すべりではないかという気がします。目のつけどころは面白いのですが、風景が読み手に伝わってこないのです。どうか鋭くあろうと思わないで下さい。文章というのは結局は間にあわせのものなんです。

全体としての今回の手紙の点数は70点というところです。少しずつ文章力は上がっています。焦らず、焦らず、がんばって下さい。次の手紙を楽しみにしています。はやく本物の春が来るといいですね。

3月12日

P・S・

「クッキー」の詰めあわせ、どうもありがとうございました。おいしく頂いております。しかし当会の規則上、手紙以外の個人的な交流は一切禁じられておりますので、今後このようなお気遣いなきようお願いします。

でもとにかく、ありがとうございました。

98

P・S・

前々回の御手紙にありました御主人との「精神的トラブル」のこと、上手く解決するといいですね。

☆

といったアルバイトを僕は一年ばかりつづけた。二十二歳のころのことである。

僕は飯田橋にある「ペン・ソサエティー」という名前のわけのわからない小さな会社と契約していて、 一通二千円の約束でひと月に三十通以上のこれと似たりよったりの手紙を書きまくった。

「あなたも相手の心に響く手紙を書けるようになります」というのがこの会社のキャンチ・フレーズだった。入会者は入会金と月謝を払い、月に四通の手紙を「ペン・ソサエティー」あてに書く。それに対して我々「ペン・マスター」が添削をし、前にあげたような感想と指導の手紙を書くのである。

女性の会員には男性の、男性の会員には女性の「ペン・マスター」がつく。僕の引き受けた会員はのべ二十四人で、年齢層は下は十四歳から上は五十三歳まで、中心は二十五歳から三十五歳までの女性だった。 つまり殆どの会員が僕99より年上ということになる。それではじめの一ヵ月ばかり、僕はひどく混乱することになった。なぜなら会員の多くは僕よりずっと文章が上手く、ずっと手紙を書き慣れていたからだ。僕といえば、それまでまともな手紙なんて殆ど書いたこともないときている。僕は冷や汗を流しながら最初の一ヵ月をなんとかやりすごした。

しかし一ヵ月たっても誰ひとりとして僕の文章能力に不満を洩らす会員は現われなかった。それどころか、僕の評判は上々である、と会社の人は僕に教えてくれた。そして三ヵ月後には僕の「指導」によって会員たちの文章力も向上してきているようにさえ思えてきた。不思議なものである。彼女たちは心の底から僕を教師として信頼しているようだつた。

その頃の僕にはわからなかったけれど、今になって考えてみれば彼女たちはみんな淋しかったんだろうと思う。ただ誰かに何かを書いてみたかったというだけのことだったのだ。そしてきっとぉ互いがお互いを許しあうことを求めていたのだろう。

僕はそんな具合に二十一の冬から二十二の春までを、足の悪いおっとせいみたいに手紙のハレムの中で過ごした。

会員たちは実にいろんな手紙を僕あてに送ってくれた。退屈な手紙があり、100ほほえましい手紙があり、悲しい手紙があった。その一年間のあいだに僕はなんだか二、三年ぶんまとめて年をとってしまったような気がする。

わけあってそのアルバイトを辞めることになった時、僕の指導していた会員たちはみんな残念がってくれた。僕もある意味では―手紙を書きつづけるという作業には正直なところ少々うんざりはしていたけれど――残念だった。多くの人々がこれほどまで僕に対して正直になってくれるチャンスなんて、この先二度とないような気がしたからだ。

☆

ハンバーグ・ステーキに関していえば、僕は彼女(最初の手紙の女性)の作ったハンバーグ・ステーキを食べることができた。

彼女は三十二歳で子供はなく、夫は世間では五番めくらいに有名な商事会社につとめていた。僕が最後の手紙に残念ながら今月いっぱいでこの仕事を辞めることになったと書いた時、彼女は僕を昼食に招待してくれた。ごくあたりまえのハンバーグ・ステーキを作ります、と彼女は書いていた。会の規則には反していたけれど、僕は思いきって行ってみることにした。何ものも二十二歳の青年の好奇心を押しとどめることはできない。101

彼女のマンションは小田急の沿線にあった。子供のいない夫婦にふさわしく、さっぱりとした部屋だった。家具も照明も彼女のセーターも、高価ではないけれど感じの良いものだった。僕は彼女が思っていたよりずっと若々しくみえることに、彼女は僕が思っていたよりずっと若いことに驚いた。「ペン・ソサエティー」は「ペン・マスター」の年齢をあかさないのだ。

しかしお互いに一度ずつ驚いてしまうと、初対面の緊張はほぐれた。我々は同じ列車に乗り遅れてしまった乗客同士といった雰囲気でハンバーグ・ステーキを食べ、 コーヒーを飲んだ。三階の窓からは電車が見えた。その日はとても良い天気で、まわりのアパートのベランダは布団やシーツでいっぱいだった。時折布団を叩くばたばたという音がした。枯れた井戸の底から聴こえてくるような奇妙に距離感のない音だった。

ハンバーグ・ステーキの味は素敵だった。香辛料がほどよくきいて、かりっとこげた表面の内側には肉汁がたっぷりとつまっていた。ソースの具合も理想的だった。僕がそう言うと、彼女は喜んだ。

我々はコーヒーを飲んでしまうと、バート・バカラックのレコードを聴きながら身の上話をした。とはいっても僕には身の上話というほどのものはないから、ほとんど彼女がしゃべった。学生時代は作家になりたかったの、と彼女は102言った。彼女はフランソワーズ・サガンのファンで、僕にサガンの話をしてくれた。彼女は『ブラームスはお好き？』が気に入っていた。僕もサガンは嫌いではない。少なくともみんなが言うほど退屈だとは思わない。

「でも私には何も書けないわ」と彼女は言った。

「今からでも遅くはありませんよ」と僕は言った。

「私には何も書けないって教えてくれたのはあなたなのよ」と彼女は言って笑った。

僕は赤くなった。二十二のころ、僕はすぐに赤くなった。「でも、あなたの文章にはとても正直なところがありましたよ」

彼女は何も言わず口もとに微笑を浮かべた。一センチの何分の一かの、とても小さな微笑だった。

「少なくとも僕はあなたの手紙を読んでハンバーグ・ステーキを食べたいと思った」

「きっとその時おなかがすいてたのよ」と彼女はやさしく言った。

まあ、そうかもしれない。

電車がかたかたという乾いた音をたてて窓の下を通り過ぎていった。103

☆

時計が五時を打った時、そろそろ失礼しなくちゃと僕は言った。「御主人が帰って来る前に夕食の仕度をしなくちゃいけないんでしょ？」

「主人はとてもとても遅いの」と彼女は頬杖をついたまま言った。

「いつも真夜中にしか帰らないわ」

「忙しいんですね」

「そうね」と言って、彼女はしばらく間を置いた。

「それに手紙にも書いたと思うけれど、私たちの仲はあまりうまく行ってないの」

どう答えていいのか僕にはよくわからなかった。

「でも、いいの」と彼女は静かに言った。本当にそれでいいみたいに聞こえた。「長いあいだ手紙をありがとう。とても楽しかったわ」

「僕もです」と僕は言った。「それからハンバーグ・ステーキをどうもありがとう」

☆

104

十年たった今でも小田急に乗って彼女のマンションの近所を通るたびに、彼女とあのかりっとしたハンバーグ・ステーキのことを思い出す。どの窓かはもう忘れてしまったけれど、その窓の奥で彼女は今も一人でバート・バカラックを聴きつづけているんじゃないかという気がする。

僕はあの時彼女と寝るべきだったんだろうか？

これがこの文章のテーマだ。

僕にはわからない。

歳をとってもわからないことはいっぱいある。

（注）

バート・バカラックの魅力とは

過去100年のポップス界において最高峰のソングライターの一人

Published on　 2月 11, 2023

アルバム『Anyone Who Had A Heart – The Art Of The Songwriter』は、バート・バカラックの60年にわたるキャリアの集大成ともいえる作品だ。

過去100年のポピュラー・ミュージック界において、まぎれもなく最高峰のソングライターの1人に数えられるバート・バカラック。現代では、彼の功績と肩を並べるソングライターは、ごく僅かだ。また、彼はパフォーマーとしてスポットライトを浴びたごく少ないソングライターの1人でもある。

バート・バカラックの楽曲は、ディオンヌ・ワーウィック、ダスティ・スプリングフィールド、エルヴィス・コステロ、カーペンターズ、オアシスのノエル・ギャラガー、トム・ジョーンズ、セルジオ・メンデス等、多彩なアーティストにレコーディングされ、その幅の広さではバート・バカラックの右に出るものはいないだろう。

彼の名前は、美しく、時に風変わりなメロディの代名詞とも言える。そのメロディは、ポピュラー・ミュージックの中でも特にロマンティックなバラードの音風景を作り出した。また、彼の楽曲は、ポップ・ヒットであれ、映画音楽であれ、ブロードウェイの音楽であれ、聴けばすぐに彼の楽曲だと分かる。彼のトレードマークともいえるコード進行、シンコペーションのリズム・パターン、独特のフレージングが入っているためである。

彼は、最も才能に恵まれ、尊敬されているソングライターの1人だ。彼のようなソングライターは、おそらくもう登場しないだろう。“天才”という言葉は、現代世界では乱用されているが、彼こそは“天才”と呼ばれるにふさわしい。バート・バカラックは天才なのだ。

初期とディオンヌ・ワーウィック

ミズーリ州カンザスシティで生まれたバート・バカラックは、ニューヨークのフォレスト・ヒルズ地域で育った。高校卒業後はマギル大学で音楽を専攻、その後アメリカ陸軍に入隊した。除隊後はヴィック・ダモーンやスティーヴ・ローレンスといった歌手のピアニストとして働き、その後マレーネ・ディートリヒの音楽監督となる。

1957年、バート・バカラックは作詞家のハル・デイヴィッドと曲を書き始めた（ハル・デイヴィッドは、バート・バカラックにとって最も縁の深い作詞家となる）。マーティ・ロビンスやペリー・コモにヒットを書いた後、ディオンヌ・ワーウィックと仕事を始めると、ディオンヌ・ワーウィックはバート・バカラックの楽曲を歌うシンガーとして、最もよく知られた存在となった。

それから間もなくして、ハート・バカラックはダスティ・スプリングフィールドと仕事をすると、彼女は映画『007/カジノ・ロワイヤル』のサウンドトラック用に「The Look Of Love（恋の面影）」をレコーディングした。

同楽曲は多くのシンガーに歌われたが、ダスティ・スプリングフィールドのヴァージョンは決定版だと多くの人々に考えられている。彼女はまた、ディオンヌ・ワーウィックの「Wishin’ And Hopin’」も見事にカヴァーした。

トム・ジョーンズやカーペンターズ

トム・ジョーンズも1965年、『何かいいことないか子猫チャン』のサウンドトラックに参加し、バート・バカラックのペンによる映画のタイトル・ソング「What’s New，Pussycat?」をレコーディングした。トム・ジョーンズはその他にも「What’s The World Needs Now Is Love」「Any Day Now」「Promise Her Anything」等のバート・バカラック楽曲をカヴァーしている。

「(They Long To Be) Close To You」は、カーペンターズが最初にレコーディングしたと考えている人が多いだろう。しかし実際のところ、同曲が最初にレコーディングされたのは、カーペンターズの7年前、1963年のことである。1960年代にドクター・キルデアとしてテレビ番組『ドクター・キルデア』で人気を博していた俳優、リチャード・チェンバレンが同曲を歌っていたのだ。

そんなカーペンターズはそのキャリアの中で、バート・バカラックの楽曲を数多くレコーディングした。アルバム『Made In America』に収録された美しい「Somebody’s Been Lyin’」もそのうちの1曲だ。

1,000人以上のアーティストが、彼の楽曲をカヴァーしていることからも、バート・バカラックの卓越した才能が分かるだろう。その中でも「The Look Of Love」は200近くのヴァージョンが存在しており、中でも特に印象的な（また、ダスティ・スプリングフィールド のヴァージョンとは大きく異なる）ヴァージョンは、ブラジルのリズムと情熱に溢れたセルジオ・メンデスによるものである。

バート・バカラック とハル・デイヴィッドが書いた「Make It Easy On Yourself」は、1962年にジェリー・バトラーのレコーディングで全米チャートのトップ40に入るヒットとなった。それから3年後、同曲はウォーカー・ブラザーズ（カリフォルニア出身の彼らは、カーナビー・ストリートに代表されるスウィンギング・ロンドン時代、ロンドンに住んでいた）によってカヴァーされると、バート・バカラックにとって初の英国ナンバーワンを獲得した。

ジャスミュージシャンによるカバー

興味深いテンポの変化とクレヴァーなメロディを持つバート・バカラックの楽曲は、 多くのジャズ・アーティストにも受け入れられ、スタン・ゲッツやピアノの名匠マッコイ・タイナーは、バート・バカラックの楽曲だけを収録したアルバムをレコーディングした。

また、ビル・エヴァンス、ウェス・モンゴメリー、ジョージ・ベンソン等もバート・バカラックの楽曲を数多くレコーディングしている。バート・バカラックも自身の曲をフィーチャーしたアルバムを数多くリリースしているが、これらのアルバムは、楽曲を書いた本人が同曲を解釈しているかが分かる素晴らしい作品だ。

コステロとのコラボ

そんなバート・バカラックは、同年代にデビューしたソングライターの大半よりもパワフルで息の長い活動を続けている。エルヴィス・コステロは1998年にリリースしたアルバム『Painted From Memory』で、バート・バカラックとコラボしている。

同アルバムには、エルヴィス・コステロが激しく情熱的に歌い上げた名曲「God Give Me Strength」の他、「The House Is Empty Now」、「In The Darkest Place」、そしてアルバムのタイトル・トラック等、全12曲が収録されている。『Painted From Memory』は、誰もがレコード・コレクションに入れるべきアルバムである。

ポピュラー・ミュージックは、世界で最も喜ばれているアート・フォームだ。そして、バート・バカラックは、ソングライターというアートを絵に描いたような人物だ――そして彼は、そのアートを過去60年にわたって発表し続けていたのだ。